

診療科便り

循環器内科(前編)

循環器内科について、第30号と第31号の2回にわたりて紹介します。

県病院には、現在12名の循環器内科医師が常勤しております。

循環器内科の対応疾患は多岐にわたりますが、代表的なものに、全身の動脈硬化に伴う疾患の診断、治療があります。動脈は3層構造になつており、血流に一番近い内膜にコレステロールなどのドロドロの粥状物質がたまつてアテローム(粥状腫)を形成します。これが次第に肥厚し、動脈の内腔を狭め、狭窄症、下肢閉塞性動脈硬化症をおこします。また、アテローム(粥状腫)が破綻し、そこに血栓ができる血流をふさぐと、心筋梗塞になります。

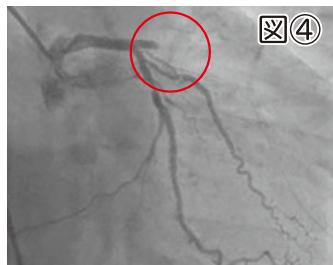
動脈硬化の原因は、脂質異常症、糖尿病(耐糖能異常)、高血圧症といった生活習慣病、喫煙習慣が県から転落した一因となっています。

今回は、具体的に2つの疾患について説明します。



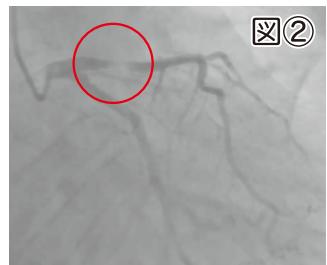
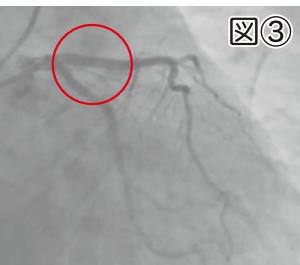
① 狹心症

症状は、胸痛、胸部圧迫感などで、5分から10分で軽減していきます。心臓を栄養している冠動脈の内腔が狭くなる疾患です。



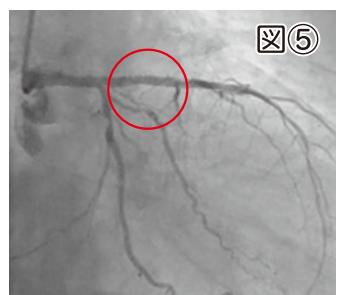
② 心筋梗塞

症状は、胸痛、胸部圧迫感などですが、30分以上たつても軽減しません。心臓を栄養している冠動脈が閉塞する疾患です。診断は、問診、心電図、心エコー図、冠動脈カテーテルが有用です。図④のように、冠動脈が途絶しています。治療の一



診断は、問診、心電図、冠動脈CTが有用です。図①のよう、冠動脈がCTで細く見えます。

治療の一つとして、カテーテル治療があります。図②③のように、狭くなつた冠動脈にステントを留置します。近年は、薬剤溶出ステントといつて、ステントに薬が塗つてあり、これが血管壁にしみこむことによつて、同部位の再発を抑えます。入院は3~4日間です。



次回は、下肢閉塞性動脈硬化症について説明します。

12名の医師で、地域の住民の皆様のため、最善の治療を提供するよう励んでおりますので、県立多治見病院循環器内科をよろしくお願いします。



つとして、狭心症と同様にカテーテル治療があります。図⑤のように、閉塞した冠動脈部位にステントを留置します。当科は24時間

365日、このカテーテル治療が可能です。狭心症と違つて、心筋が一部壊死するため、当院リハビリテーション科と共同で心臓リハビリテーションを行い、社会復帰を目指します。入院は2~3週間です。

次回は、下肢閉塞性動脈硬化症について説明します。

12名の医師で、地域の住民の皆様のため、最善の治療を提供するよう励んでおりますので、県立多治見病院循環器内科をよろしくお願ひします。